
怪奇博士

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪奇博士

【Nコード】

N2181Y

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

主人公は小学生の男の子。「怪奇博士」とともに、悪い妖怪を退治するのです。

雪の女王

タカシは言いました。

「ねえおじさん、こんなところで何をしているの？」

その人はあまり見かけない顔で、その行動だけでなく、奇妙な服装がタカシの目を引いたのです。

背は低くでっぷりと太り、何年前のものかもわからない古びたコートを身につけています。頭は、ゆで卵のようにつるつるにはげているのです。

「君の名はなんというのだい？」

「タカシ」

「そうかタカシ君か。わしのことを、人は怪奇博士と呼んでいるよ」

「怪奇博士？」

「ふふふ、変なあだ名だろう？ この世の怪奇現象を研究するのが仕事だからついたのさ。でも自分でも気に入っている名だよ」

「その怪奇博士が、こんな森の中で何を掘っているの？ 雪の中に何か埋まっているの？」

「なぜわしが雪を掘っていると思うのだね？」

「だって、博士のスコップには土がついてないもん。この森の中を歩き回って、さっきから何カ所も掘り返しているね。探し物は見つかったの？」

「ふうむ。君はよく観察しているね。わしは『雪の女王』を探しているのさ」

「雪の女王って？」

「興味があるのかい？　なら見ておいで。雪の女王はとても珍しいものだが、もう少しで見つかりそうな気がするのだよ」

だからタカシは、おとなしく待つことにしたのです。

怪奇博士は仕事に戻りました。あちこちにスコップの先を軽く突き刺しては、雪の下の手ごたえを探っているのです。しばらくして、博士が声を上げました。

「おお」

「博士、雪の女王が見つかったの？　あれ、何もないじゃないか」

かけていたメガネを外し、博士は差し出しました。

「タカシ君、これをかけてごらん。そうすればわかるだろう」

半信半疑だったのですが、いわれたとおりにして、タカシははっと息をのむことになりました。メガネのレンズを通してだと、その姿をはっきり見ることができたのです。

「博士、これが雪の女王なの？ 変な格好をしてるね。まるでドロミみたいな形のキノコだ。色も人の骨にそっくりだし」

「あつタカシ君、手を触れてはいけないよ。なんでもないキノコに見えるが、実は妖怪なのだから」

「妖怪って？」

「学校ではまったく教えないことだから、君が知らなくても不思議はないがね。世の中には妖怪というものがいるのだよ」

「オバケのこと？」

「まあね。しかし妖怪は、ある特殊なレンズを通してしか姿を見ることができない。そのレンズを利用して作ったのが、いま君がかけているメガネなのさ」

「これ？」

顔から外し、タカシは物珍しそうに眺めましたが、レンズがわずかに緑色がかっている他は、特に変わったところありませんでした。もちろんメガネを外すと、雪に掘られた穴の中には何も見えなくなってしまうのです。

タカシはもう一度、妖怪メガネをかけてみました。すると雪の女王も再び姿を現すのです。怪奇博士が口を開きました。

「それは雪の女王といって、キノコそっくりの形をした妖怪だが、大きな特徴がある」

「どんな？」

「死者の魂を食べて育つということさ」

「死んだ人？　ここは墓地じゃないのに？」

「わたしはある人から、行方不明人の捜索を頼まれた。たずね人は殺人事件の被害者になったらしいのだが、警察に逮捕された犯人も、死体がどこに埋めてあるのかはガンとして白状しなかった」

「どうして？」

「死体が見つかれば、自分は殺人犯となってしまうからさ。死体が見つからないかぎりには失踪事件でしかない。受ける罰が大きく変わってしまうからね」

「ははあ」

「失踪者の家族から頼まれ、わたしは死体を捜し始めた。犯人の行動範囲から見て、死体が埋められているのはこの森だと考え、いまタカシ君の目の前で、埋められている場所を発見したということさ」

「これからどうするの？」

「この場所をあとで警察に知らせておくことにしよう。タカシ君は妖怪に興味があるのかい？」

「うん、あるよ」

「ではそのメガネはあげるよ。うちにまだもう一つあるからね」

「本当にいいの？」

「いいさ。だがもうすぐ暗くなる。君はこのあたりに住んでいるのかい？　そろそろ家へ帰ったほうがいいよ」

「博士の家はどこにあるの？」

「この森の奥さ。道は一本しかないから、迷うことはない。気が向いたら遊びにおいで」

「うん」

「ではそのメガネを持ってお帰り。念のため、森の出口まで案内をつけよう。メガネをかけてごらん」

タカシは言われた通りにしました。そして再び息をのんだのです。

別れのあいさつをし、森の出口へと向けてタカシは歩き始めました。日が暮れる前には家へ帰ることができたのですが、メガネなしでは、なんというこない冬の森にすぎません。

でも途中で、タカシは何度かメガネをかけてみたのです。そのたびにはっきりと見ることができました。

灰色をして、しっぽの長い巨大な『送りオオカミ』が、森の出口までしっかりと付きそい、タカシを送り届けたのです。

動物愛好家

電車に乗っていて、タカシは偶然、怪奇博士と出会いました。気がつくと、同じ車内にいたのです。

怪奇博士は、意味ありげに目くばせをするではありませんか。

「タカシ君、あそこに立っている男を見てごらん。何か感じないかい？」

「背広姿のサラリーマンみたいな人？　ちょっと疲れているみたいだけど、特に変なところはないよ」

「わしがあげた妖怪メガネを持っているかい？　持っているなら、かけてごらん」

最初に森の中で出会った日以来、タカシはいつもカバンの中に忍ばせていました。すぐに取り出して、かけたのです。

「あっ」

「タカシ君、わかったかい？」

普段は目に見えない妖怪も、このメガネを通してなら、はっきりと姿を見ることができるようなのです。あの男は立っているのではなく、実は首の後ろを一匹の妖怪につかまれ、支えられているのです。

背が高く、筋肉が隆々として、でも水かきのあるおかしい妖怪なのです。

「博士、あの人はどうなっているの？」

「あの男は死体さ。それをあの妖怪が、あやつり人形のように動かしているのだよ」

「どうして？ 何のために？」

「それはまだわからん。タカシ君、やつのをつけてみようじゃないか」

男のあとをついて、二人はある駅で電車を降りました。

「そういえば、なんだかおかしな歩き方だなあ」

ホームを歩きながら、タカシも思わないではいられませんでした。

駅前には、ショッピングセンターがありました。男はその中へ入っていったのですが、タカシたちも中まで追っていくことはしませんでした。出口で待っていることにしたのです。

やがて男が出てきました。

タカシがびっくりしたのは、つかつかと歩み寄り、怪奇博士が話しかけたことでした。

「やあ重そうな荷物だね。少し手伝ってあげようか？」

男はギクリとしたようでした。次の瞬間、思いがけないことが起こったのです。

死体を捨て、荷物だけを持って、妖怪はサッと逃げ出したではありませんか。

あつという間の出来事だったのです。通行人の多い場所に、怪奇博士とタカシは取り残されてしまいました。しかも二人の目の前には、死体が転がっているのです。

怪奇博士が叫びました。

「すぐに逃げるんだ、タカシ君。警察が来るとまずい」

タカシがその通りにしたのは、いうまでもありません。人ごみをかき分け、あんなに走ったのは運動会以来だったに違いありません。

駅に駆け戻り、最初にやってきた電車に飛び乗りました。

意外に身軽だということなのか、同じ車内に怪奇博士もいることに気がつきました。

「博士、大丈夫だった？」

「やれやれ、こんなに走ったのは何年ぶりかな」

「あの妖怪は何を考えているの？」

「さっぱりわからんよ。しかし手がかりがないわけじゃない。これをごらん」

「それは何？」

「ショッピングセンターのレシートさ。あわてて逃げ出すときに、妖怪が落としていった」

「それから何がわかるの？」

「妖怪が何を買い物したかが書いてある。驚くなかれタカシ君、やつは生肉を20キロも購入しているのだよ」

「だからあの荷物はあんなに重そうだったんだね。でも20キロなんて、何に使うのかなあ」

「ふうむ」

「どうしたの博士？」

「少し心当たりがあるのだよ。こうしてはおれん。すぐに出かけよう」

「どこへ？」

「いいからついておいで」

タカシが連れていかれたのは、あまり見覚えのない通りでした。いくつも枝分かれしながら、狭い路地が走っているのですが、怪奇博士はよく知ったふう歩いてゆきます。

物珍しそうに、タカシはキョロキョロしていました。

目的地に到着しました。

小さな店でした。ガラス窓のむこうには、ペット動物が入れられているカゴを見ることができます。珍しい鳥やチンパンジー、ワニなどですが、店の奥にはもっと大型の動物もいるのかもしれない。

店の中に入り、怪奇博士は主人と話し始めました。

店主は背の低いまじめそうな男ですが、怪奇博士の話を聞いて、見る見る表情が変わってゆくのでした。

ついにうなずき、ノートを開き、主人は怪奇博士に向けて何かを指さしています。

怪奇博士はすぐに店から出てきました。

「博士、何かわかったの？」

「ああタカシ君、わしの予想通りだった。住所がわかったから、さっそく出かけよう」

「どこへ？」

「この店の主人は、ある男にライオンを売ったのさ。だがその前に、警察へ行って事情を話し、同行を頼んだほうがいいな」

怪奇博士は言葉どおりにしたのです。1時間後には、タカシたちはある屋敷の入口の前にいました。

門には鍵がかかっていましたが、緊急事態なのです。鍵はすぐに壊されました。

とても大きな屋敷でしたが、人っ子一人いなくて、でも一番奥にある広い部屋がひとときわ目を引きました。

この部屋はオリになっていて、中でライオンが飼われていたのです。怪奇博士は警察官に話しかけました。

「警部、あの死体の身元はわかりましたか？」

「ショッピングセンターの前にあった死体ですか？ ええ、この屋敷の主人であるとわかりました。大金持ちでしたが家族もおらず、一人暮らしだったそうです」

「何か持病があったのではありませんか？」

「あれ、よく知ってますね。心臓が悪かったそうです。医師の話では、大きな発作がいつ起こっても不思議のない状態だったとか」

「それが運悪く起こってしまったわけですね」

「いつです？」

「死体は、死後何日経過していました？」

「検視官の言うには、3日ほどだそうですよ」

「なら3日前に発作を起こし、死んだのでしょうか」

「でも博士、おかしいじゃありませんか。この3日間、誰がライオンにエサをやっていたんです？ ごらんなさい。あのライオンは今、

いかにも新鮮な生肉をムシヤムシヤやっているじゃないですか」

「さあ、それはわしにもわかりません。しかし警部、飼い主の死んだあの気の毒なライオンは、これからどうなるのですか？」

「すぐに動物園へ連絡しようと思っています。動物園なら、引き取ってきちんと世話をしてくれるでしょう」

「それなら安心です。では警部、わしたちはこれで引き上げますよ」

「ああ博士、ご苦勞でした。ご協力に感謝します」

こうして、タカシと怪奇博士は屋敷をあとにしたのです。道路を歩きながら、タカシは口を開きました。

「ねえ博士、あの妖怪が死体をあやつって、死んだ飼い主のかわりに生肉を手に入れていたんだね。妖怪の正体は何だったの？ 何のためにそんなことをしたの？」

「何のためにというのは、簡単に答えることができる。ただの親切心からだろうよ」

「妖怪にそんなものがあるの？」

「あるさ。あのライオンを飢え死にさせるのが忍びなかったのだらうね」

「妖怪の正体はなに？」

「うん？ ああタカシ君、その質問の答えは、どうやら自分の目で

見ることができそうだよ」

「どうしてさ？」

「屋敷の庭に、立派な池があったことを覚えているかい？」

「丸い形をして、ものすごく広い池だったね。僕は学校のプールか
と思った」

「あの池はどうやら、地下パイプでその川とつながっているらしい。妖怪メガネをかけてごらん。誰かが川原をこちらへやってくる
じゃないか」

「あっ」

怪奇博士の言うことは本当でした。タカシは思わず目を丸くして
しまったのです。でもすぐに、電車の中で見た妖怪だと気づくこと
ができました。

「タカシ君、あれはカップだよ」

「ああ、そうか」

そういわれれば背中にはこうら、頭の上には水の乗る皿があるので
す。

二人のそばへやってきて、カップは何か言いたげに見つめるので
した。でも言葉は発しません。

怪奇博士が口を開きました。

「心配しなくてもいいのだよ、カップ君。あのライオンは動物園へ行くことが決まった。もう飢えることはないさ」

「キーツ」とカップは声を上げました。

「そうさ、よかっただろう？ 君もご苦労だったね」

怪奇博士がいい終わると、もう一度うれしそうに鳴き声を上げて川の中へ飛び込み、カップはあっという間に姿を消してしまったのでした。

美貌の娘

「ねえ博士、この電車のドアは、どうして閉まらないのかなあ？」

タカシに話しかけられ、怪奇博士も不思議そうな表情を浮かべる
ことになりました。

もうベルが鳴って発車時間なのですが、他はみなすべて閉じてしまったのに、なぜか一つだけ開いたままのドアがあるのです。

駅員がやってきて、押したり引いたりすると、やっとドアは閉じ、
電車は発車することができました。

「ねえ博士、あのドアは調子が悪いのかな」

「駅員がドアを閉めることに成功する直前、滑り込むように乗ってきた客があったね。ドアが素直に閉じていれば、この人はきつと乗り遅れてしまっただろう」

「どのお客さん？」

「あの席に座っているよ」

怪奇博士の指さす方向へ目をむけ、タカシは目を丸くしたのです。
た。若い娘ですが、見たことがないほどの美人だったのです。

「きれいな女の人だねえ」

「あまりに美人だから、人間だけでなく、妖怪もほれるほどだと言

うべきかな？」

「どうして？」

「タカシ君、妖怪メガネをかけてごらん」

「あっ」

「わかったかい？ あの娘の隣には妖怪が腰かけているね。大きな声を出すのではないよ。気づかれないように、そつとあとをつけてみようじゃないか。さっきはあの妖怪が、娘が乗り遅れないようにドアを押さえていたのだよ」

娘は次の駅で下車しました。タカシと怪奇博士も続けてホームに降りたのは、もちろんです。

「博士、あの女の人は駅を出て、道を歩いてゆくよ」

「夕方だからね。学校を終えて家へ帰るところかな。妖怪もあとをついてゆくぞ。見つからないように、わしたちも歩こうじゃないか」

やがて娘は、一軒の家の中へ入ってゆきました。それがとても大きな屋敷だったので、タカシは目を丸くしたのです。

「あの女の人は、この屋敷のお嬢さんなんだね」

「しかもあの美貌ときたもんだ。タカシ君、あの妖怪はどこへ行った？」

「あそこだよ。ほら塀を乗り越えて、屋敷の中へ入っていった」

「手馴れた感じだな。もうかなり長く娘のあとをつけ回しているようだ。さあタカシ君おいで。屋敷の門をたたこう」

「どうして？」

「この主人に話をするためさ。あの妖怪の件を耳に入れたほうがよさそうだ」

5分後には、怪奇博士とタカシは応接室へと通されていました。屋敷の主人は白髪の老人で、怪奇博士の真剣な表情を信用したのか、すぐに会ってくれたのです。

怪奇博士は話し始めました。

「ご主人、お宅のお嬢さんについて少し心配なことがあります、こうし
てうかがったのです」

「それは何です？」

「お嬢さんが妖怪に付きまとわれていることをご存知ですか？」

老人がひどく驚いたのは、いうまでもありません。

「何ですと？ 和代が？」

「和代さんについて、最近何か変わったことはありませんか？」

「そういえば本人も不思議がっておりました。何か最近はとても運
がいいのだそうで。先ほども駅で電車に乗り遅れそうだったのが、

なぜかドアが閉まらず、和代は乗り込むことができました」

「そのほかには？」

「野良犬にほえられ、もう少して噛み付かれそうになったときにも、その犬が突然おとなしくなり、まるで見えない足でけとばされたかのように逃げていたり。そういったことが、なぜか連続するそうです」

「それはすべて妖怪の仕業ですよ」

「なんですって？」

怪奇博士は事情を簡単に説明しました。

「…というわけですよ。おそらく妖怪は和代さんが非常に気に入り、恋をしてしまったのでしょう」

「それはどういう妖怪なのです？」

「わしの見るところザシキワラシですな。おそらくこの屋敷に百年以上前から住み着いているのでしょう」

「おお、なんということだ」

「いずれこの妖怪は、和代さんに結婚を申し込んでくるでしょう。あるいは誘拐をくわだてるかもしれない。できるだけ早く手を打つことですな」

「どうすればいいのです？」

「それは…」と怪奇博士は答えかけたのですが、言葉が最後まで続くことはありませんでした。

応接室のドアが突然開き、和代が姿を見せたではありませんか。

「お父様」

「和代、聞いていたのかい？」

「お父様、あれはそんな悪い妖怪ではありません。私を守ってくれているのです」

「どういふことなのだい？」

「こういうことよ。怪奇博士もよく見てくださいな」

タカシたちに向かって、和代は背中を向けたのです。そして髪をかき分け、後頭部を見せたのでした。

「ひいっ」

タカシは思わず悲鳴を上げてしまいました。和代の後頭部にはなんと、狼のように大きく裂けた口があったではありませんか。

怪奇博士がうめきました。

「おお、真の敵は二口女か」

「ええ、そうです。ひょんなことから私は取り付かれてしまいました」

た。この二口女という妖怪は、普段は眠っています。

でも目を覚ますと猛烈な食欲で、この口を開いて、ご飯でも何でもバリバリ食べてしまふんです。抑えきれない空腹感に、私は真夜中の台所に忍び込んで、冷蔵庫から盗み食いをするのだってあるのです」

「それで？」

「けどあのザシキワラシがそばにいてくれるかぎり、二口女は眠ったままでいるんです。二口女が目を覚ましかけると、そのたびにザシキワラシが呪文をかけてくれるんです」

「だからお嬢さんが外出するときにも、姿を透明にして、ザシキワラシはついてきてくれるというのだね」

「そうなんです」

腕を組み、怪奇博士は考え込んでしまいました。

「ううむ、これは大変なことだぞ。お嬢さんの体から二口女を追い出さねばならないということか」

老人が怪奇博士に頭を下げたのは、このときのことでした。

「博士、どうか和代を助けてやってください。お願いします」

「ええ、なんとか考えてみましょう」

すぐに準備が始まりました。あるところに大切に保管されていた

妖鏡という道具が、その日のうちに屋敷に運び込まれました。

次に怪奇博士がなんと美容師を屋敷へ呼んだときには、意外さのあまり、タカシも口をポカンと開けたものでした。

「博士、美容師を呼んで、何をするつもりなの？」

「まあ見ていてごらん。わしに考えがあるのさ」

やがて用意は整いました。広い部屋の中央に妖鏡が置かれ、美容師の手を借りて美しく装った和代も続いて入ってきたのです。

それだけではなく、妖怪メガネをかけているタカシの目には、部屋のすみで油断なく身構えているザシキワラシの姿もはっきり見えているのでした。

ザシキワラシは子供の格好をして、江戸時代のような着物を着ています。

和代の姿には、タカシもため息をつかないではいられませんでした。美容師の手で念入りに髪が整えられ、化粧もされ、見違えるようなのです。普段でも目を引く姿が、さらに美しく変わっているのです。

まるで絵画から抜け出たかのようにではありませんか。

タカシは言いました。

「博士、これからどうするの？」

「そろそろ始めるよ。それはそうと和代さん、着飾ったご自分の姿を、あなたはまだ見ていないのでしょうか」

「はい。美容師さんは、鏡のない部屋で仕事をしたんです」

「それでよいのです。ではタカシ君、用意はいいかい？ わしが合図したら、妖鏡にかかっている布をどけるのだよ。そうすれば鏡面がむき出しになる。

和代さんは妖鏡の正面に立ってください。そう、鏡を見つめるのです。じゃあタカシ君いいね。サツと布を外すんだ。1、2、3、それっ」

一体何が起こるのか、タカシには想像もつきませんでした。

布がどけられると、妖鏡が姿を現しました。

大人でも数人がかりで持ち上げるほど大きな鏡です。表面はピカピカに磨かれ、あまりにもまぶしくて、タカシは思わず目を細めたほどでした。

和代の表情の変化は劇的でした。

鏡に目を落とし、一瞬はいぶかしんだようでしたが、映っている美しい姿が自分であるとやがて気づいたのでしょうか。目を丸くし、続いてにっこりと微笑んだではありませんか。

二口女という妖怪はいつも空腹で、極めつきの欲張りなのですが、美女が特に好きなのです。だから和代に取り付き、苦しめていたのでしょうか。

しかし二口女はいま、もっと美しい女を発見したのです。

もちろんそれが鏡の中の像とは知らず、二口女は和代の体を離れていったのでした。

ただの道具のように見えますが、妖鏡も実は一種の妖怪だったのです。しかも肉食で、他の妖怪をバリバリと食べる性質があるので。

そんなこととは知らず、二口女は妖鏡へと近づいてゆきました。そして、あっという間に妖鏡に捕まってしまったのです。

勝負は一瞬でつきました。

「あーっ」という悲鳴を残して、二口女は鏡の中へ消えてしまいました。

これでもう安心でしょう。悪い妖怪は妖鏡に食べられてしまったのです。

部屋の中に張り詰めていた緊張は一瞬で解けました。

そのあとには、ほっとして泣き出した和代と、満足そうな怪奇博士と、目を丸くしているタカシ。そして、すべてを見届けて安堵した様子で、屋根裏へと戻ってゆくザシキワラシの姿があったのです。

犬と飼い主

「ねえ博士見てよ。かわいい犬を連れて散歩している人がいるよ」

タカシに話しかけられ、怪奇博士はその方向を向いたのです。

「どれどれ、あの犬かい？ ああ本当にかわいいね。飼い主のお婆あさんに寄り添って、いかにも守っているという感じだ。しかしタカシ君、妖怪メガネをかけてごらん」

「あっ」

タカシは思わず声を上げてしまいました。犬だと思っていたものは、実はなんと巨大な妖怪だったではありませんか。

「博士、あの妖怪は何なの？ 4本足だけど背が高くて、馬ぐらいある。体にも奇妙な模様があるね」

「あれはキリンだよ」

「えっ？ 動物園にいるやつ？」

「ははは、そうではなくて、古くから存在する妖怪さ。動物園のキリンと名前は同じだが、まったく関係はないのだよ」

「あのお婆あさんは、自分の飼い犬が実は妖怪だと知っているのかなあ」

「おそらく知らないだろうね。ほら、いまでも頭をなでてやっている

じゃないか」

「ああ本当だ。キリンもおばあさんの手をなめているよ」

「しかし奇妙だな。神の使いと呼ばれるキリンが、なぜ人に飼われているのだろう。よしタカシ君、ひとつあのおばあさんのあとをつけてみようじゃないか」

犬と飼い主のあとをついて、タカシと怪奇博士はゆっくりと歩いてゆきます。おばあさんと犬は、やがて小さな家の中へ姿を消しました。

タカシたちは、家の前で足を止めることになりました。

「ねえ博士、これからどうするの？」

「さあ困ったな。そうだタカシ君、あそこの喫茶店に入って、少し様子を見ようじゃないか」

二人は、窓に近い外がよく見えるテーブルに席を取りました。ここからなら、おばあさんの家を視野に入れておくことができます。

おばあさんの家で騒ぎが起こったのは、数分後のことでした。家の前に自動車が止まり、人相のよくない男たちが降りてきたのです。

大きな声を上げ、男たちは玄関のドアを乱暴にたたき始めたではありませんか。

「おいババア、開けろ」

これは平和な風景ではありません。タカシと怪奇博士はすぐに喫茶店を出ました。

男たちの行動はエスカレーターしています。入口のドアをドンドンとけり始めているのです。

「博士、これはどうなってるの？」

「どうやら、おばあさんは脅されているらしいね。男たちはこの家をつぶし、土地を奪って、新しいビルを建てるつもりなのだろう」

「おばあさんを追い出しちゃうの？」

「そうらしいね」

「かわいいそうだなあ」

ドアをこじ開け、男たちはすでに家の中へと消えています。怪奇博士が声を上げたのは、このときのことでした。

「おやタカシ君、あれをごらん」

その瞬間、おばあさんの家からあの犬が飛び出してきたのです。そして一直線に走り、男たちが乗り付けた高級自動車の屋根に飛び乗ったのでした。

いくら魔力で普通の犬に見せかけていても、正体は妖怪なのです。体重は相当あるに違いありません。

屋根の上で犬が飛びはねるにつれ、車体はガンガンと音を立てて

大きく揺れ、ついにはバラバラに壊れ始めたではありませんか。物音を聞きつけ、家の中から男たちが飛び出してきたのは、いうまでもありません。

賢い妖怪なのでしょう。男たちが姿を見せると同時に破壊をやめ、犬は電柱の影に隠れたのです。

偶然ですがそこにはタカシも身を隠していたのですが、犬は彼を見上げ、ニヤリと笑ったではありませんか。

「君は、もうしばらくここに隠れておいで。おもしろいものを見ることができるよう」

タカシは目を丸くしました。確かに妖怪が口をきいたのです。

もはやくず鉄になってしまった高級自動車を見て、男たちは呆然としています。何が起こったのか理解できないのでしょうか。

男の一人が怪奇博士を見つけ、話しかけました。

「おいおっさん、オレの車をこんなにしたのはおまえか？」

「とんでもない。普通の人間には、とてもできることじゃないじゃないか」

「犯人の姿は見なかったか？」

「ああ見たとも」

「なんだって？」

「わしははっきり見たのさ。犯人は若い男だった。筋肉が発達してとても背が高く、巨大なトンカチを軽々とあやつるのさ。それであんなの車を破壊したのだよ」

「そいつはどこへ行った？」

「さあ、まだそこらにいるのではないかな？」

男は仲間たちを振り返りました。

「おいおまえたち、もっと仲間を連れてこい。その若い男に仕返しをするんだ。このままじゃ腹の虫が治まらねえ」

男たちはサッと走ってゆきました。

タカシが電柱の影から出てきたのは、このときのことでした。犬はもう姿を消していました。

「博士、あんなことを言ってもいいの？」

「かまうもんか。あのおばあさんに対する嫌がらせは以前から続いていたのだろう。悪い連中をやっつけるいい機会さ」

「どうやって？」

「それはタカシ君、もうしばらく見ておいで」

男たちは10分もしないうちに戻ってきました。人数は倍ほどに増えています。みな人相の悪い乱暴そうな者ばかりです。

そのうちの一人が叫びました。

「ボス、やつが出てきましたぜ。ババアの家隠れてやがったんだ」
「気をつけろ。やつはババアの身内らしいぞ」

おばあさんの家から現れた若い男の姿を目にして、タカシは口をポカンと開けてしまいました。その姿は、怪奇博士がとっさにでっち上げたものとそっくりだったからです。

身長は本当に高く、少しかがまないと玄関からは出てこれません。軽々とあやつるトンカチは、まるで野球のバットのようなサイズではありませんか。

そしてこの若者の強さときたら。

悪い男たちはあつという間にはじき飛ばされ、地面に倒れてうめき声を上げるようになりました。最後に若者が無言でもう一度トンカチをかざすだけで、男たちはあわてて立ち上がり、逃げていったのです。

男たちの姿が消えると若者はすぐに犬の姿に戻り、家の中へと帰ってゆきました。

でもその前に犬はタカシたちを振り返り、口をきいたのです。

「もう何世紀も前のことだが、私はあの老女の先祖に世話になったことがあるのだよ。今はその恩返しをしているのさ」

タカシが言いました。

「その恩返しはいつまで続くの？」

「もちろん老女の命があるかぎりさ。何があっても彼女を宿無しにはさせないよ」

「それって、何年も先の話じゃないかなあ」

「考えてごらん。何世紀も生きる我々妖怪から見れば、人間の一生などほんの一瞬のものにすぎないだよ。ああ、私は恩返しを最後まで続けるつもりでいるのさ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2181y/>

怪奇博士

2011年11月15日13時38分発行